

アフリカ諸国の「民主化」再考

－ 共同研究会中間報告 －

津田 みわ 編

2004年3月

独立行政法人 日本貿易振興機構

アジア経済研究所

まえがき

本書は、平成 15 年度にアジア経済研究所で実施された共同研究会「アフリカ諸国の『民主化』再考」の成果である。この研究会は 2 年間の予定で構成されており、平成 16 年度には「『民主化』とアフリカ諸国」研究会に引き継がれる。1 年目の成果である本書は、その中間報告に相当する。

1980 年代末から 1990 年代にかけて、アフリカでは多くの国々が軍政や一党制からの脱却にひとまず成功した。「民主化」と総称されることの多いこの政治変化だが、各国レベルの政治的展開の具体は多様である。数度の複数政党制選挙をこなして平和的に政権交代を果たしたガーナのような国がある一方で、歪みの多い選挙を繰り返す中で新たな政治危機に瀕してきたコートダイヴオワールのような国もみられる。当初アフリカ諸国の「民主化」論においては、民主主義への「移行期」「定着期」という段階論でこれを整理する流れが主流となったが、内戦の勃発、国家内での地域主義が進む中での市民権概念そのものの変容、見かけの上で整備された手続的民主主義の下で制限の続く参加と自由の問題など、「民主化」によって生じた現象は、単線的整理に必ずしもなじまないものであることが明らかになりつつある。

一連の政治変動について、まずはその具体に立ち返り、詳細な事実関係の把握と史的な跡付けを行うこと、それを基礎に「民主化」の名の下で具体的には何がおこってきたのかを抜本的に検討し直すこと、それこそが取り組むべき課題ではないか。この問題意識を共有する 5 人のアフリカ地域専門家が集まって組織されたのが、本研究会である。いくつかの学会や様々な共同研究会、プロジェクトなどで 5 人が折に触れ顔を合わせる中で、本研究会を立ち上げる構想自体が、数年をかけて次第に練り上げられてきた感もある。若干の濃淡はあるものの、政治学、社会学、国際関係論を共通のディシプリンとして持った 5 人が集まり、本格的にひとつの課題に取り組んだこの研究

会では、毎回の議論は常に密度濃く、共有する知識の多い分、時に互いの批評やコメントが報告者の議論を根底から覆すこともあった。共同研究会ならではの醍醐味に満ちた、まことに実り多い1年間であったと思う。

来年度の末にこの研究会が最終成果を発表するとき、「民主化」という総称への何らかのオルタナティブをそこで提示できるかどうか 次年度はまさにその勝負の年となる。本書に収められた各論文は1年を経た時点での中間報告であり、各自が最終的に目指す研究構想の中での試論として編まれている。お読みいただいた方々からできる限りたくさんのご批判やご意見をいただいで、今後の研究の糧とさせていただければと願う。

本研究会はまた、委員5人を取り巻くたくさんの方々のご協力で成立したものであった。まず、講師としておいでいただき（講演タイトル「民主化理論とアフリカ」）、「民主化」論の展開について委員の共通理解を醸成して下さったのみならず、ラテンアメリカ、欧米諸国との比較からアフリカの国々にかんする国家論的議論へとわたしたちの関心の目を広げて下さった恒川恵市氏（東京大学）、そして、最新の研究成果（タイトル「セネガルにおける落花生関連公社の再編（1960～80年） ONCAD解体にかんする「国家に抗する農民」モデル批判」）を報告いただき、歴史的なアプローチと制度研究の可能性について刺激的な議論を展開して下さった佐久間寛氏（東京外国語大学大学院地域文化研究科）のお二人に深く謝意を表したい。また真島一郎氏（東京外国語大学）のほか、平野克己、望月克哉、武内進一、児玉由佳、福西隆弘、牧野久美子、原島梓の各氏には、研究会に参加いただき、活発な議論を展開していただいた。記して感謝したい。

2004年3月

「アフリカ諸国の『民主化』再考」研究会
主査 津田みわ

目次

まえがき	3
目次	5
執筆者紹介	7
第1章 アフリカの政治変動とその現在の再考のための視角	
遠藤貢	9
はじめに	9
第1節 アフリカにおける政治体制を論じる視角をめぐって	12
1 オッタウェイの挙げる準権威主義体制の特徴	12
(1) 特徴	12
(2) 構造的要因	15
2 オドンネルの代理民主主義の議論	18
3 視角に関するまとめ	20
第2節 ザンビアの事例	21
1 1990年代の「民主化」経験：選挙年を中心とした経緯	21
(1) 1991年選挙	21
(2) 1996年選挙	22
(3) 2001年選挙	24
(4) ザンビアにおける民主主義の危機？	26
2 2001年選挙過程における問題群	28
(1) 「三選論争」と政党制の変容	28
(2) 「市民社会」の対応と活動	31
(3) 「参加」への制度運用上の制約	33
(4) 憲法上の自由への制約	35
(5) 政府と与党の境界の問題	36
おわりに	37
注	37
参考文献	39
表	41
第2章 アフリカ「民主化」再考のためのナイジェリア制度 エンジニアリング考	
－ 集団への資源の分配が剥奪を醸成するメカニズム － 落合 雄彦	43
第1節 問題意識	43
第2節 アフリカにおける「民主化」と集団性	46
1 「民主化」の含意	46
2 集団性という特質	48
第3節 ナイジェリアにおける民政移管への制度エンジニアリング	53
1 行政区画の細分化	53
2 憲法の「連邦としての性格」原則	56
3 なぜ、集団への資源の分配が剥奪を醸成するのか	58
第4節 むすびに代えて	62
注	63

参考文献	64
図表	66
第3章 コートディヴォワールにおける新家産制の変化・変質	
－ 1990年以後期の政治分析に向けて －	佐藤章 71
はじめに	71
第1節 「保護された裾野の広い新家産制」の構築と衰弱：ウフェ政権	74
1 ウフェの新家産制	74
2 個人支配を支えた四つの条件：保護された裾野の広い新家産制	76
3 新家産制への打撃：経済危機とフランスの対アフリカ政策の変化	80
第2節 延命された新家産制：1990～1999年	81
1 政治的ゲームとしての民主主義	82
2 野党側の問題：階層的特徴	85
第3節 新家産制の「第二の破裂」：ベディエ政権の崩壊と軍事政権	88
1 ベディエ政権の崩壊	88
2 軍に生じた変化	90
3 軍事政権：失敗した個人支配者	92
むすび	94
注	96
参考文献	101
第4章 マラウイとガーナの民主化過程	
	高根務 105
はじめに	105
第1節 マラウイの政治史と民主化過程	106
1 民主化以前：バンダとMCPへの権力集中	107
2 民主化後：「カメレオン民主主義」と複数政党制	108
第2節 ガーナの政治史と民主化過程	113
1 民主化以前：2大政治勢力の誕生と継続	114
2 民主化後：新たな2大政治勢力への移行	116
まとめ：政治史の継続性と民主化	119
注	120
参考文献	121
図表	123
第5章 ケニア的複数政党制	
－ その軌跡と機能変化する法制度 －	津田みわ 127
第1節 はじめに	127
第2節 複数政党制選挙の軌跡	131
1 KANUの政権維持装置の中で	131
2 「3回目選挙」の成功	137
第3節 ケニア的複数政党制へ	142
1 政党機能の「歪み」	142
2 機能変化する法制度	147

第4節 おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	151
注	152
参考文献	155
表	158

執筆者紹介

遠藤 貢（えんどう・みつぎ） 第1章担当
研究会委員
東京大学大学院 総合文化研究科 助教授

落合 雄彦（おちあい・たけひこ） 第2章担当
研究会委員
龍谷大学 法学部 助教授

佐藤 章（さとう・あきら） 第3章担当
研究会幹事
アジア経済研究所 地域研究センター

高根 務（たかね・つとむ） 第4章担当
研究会委員
アジア経済研究所 地域研究センター

津田 みわ（つだ・みわ） 第5章担当
研究会主査
アジア経済研究所 新領域研究センター
